

グラフ 1 金泉郡公普別の生徒数推移

出典：朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』各年版。

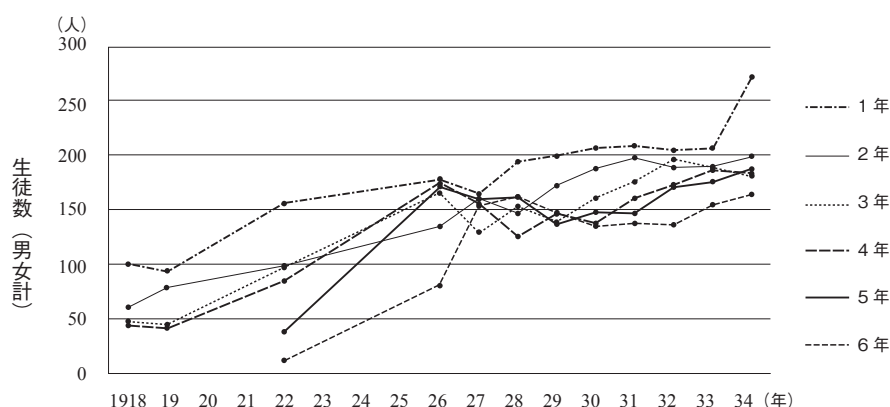
慶尚北道編纂『自大正8年至昭和3年 慶尚北道統計年報』1930年。

## (2) 金泉公普と郡内教育状況

得られる資料に限界があり、おおよその傾向となるが、まず、1918年～34年までの金泉公普の学年別生徒数を見ることによって、生徒が中途退学せずどの程度就学し続けたのか、その定着の様相を考察したい。グラフ2からわかるように、1910年代末は100名前後の入学数（1年生5月の数値）が、4年生（修業年限4年制）になると40名台と半数以下に減っていた。それが少なくとも1920年代後半からは200名程度の入学数に対して6年生の在学者は150名前後だった。1920年代には修業年限が6年へと延長されたにもかかわらず、各学年の人数が近似値となる傾向があり、中途退学が減り定着していく様子が見えてくる。1年生の人数が突出している年は、入学希望者の増加に対応して学級数を増やし、学校規模を拡大したと思われる。また、金泉公普は、1922年には郡内唯一の6年制普通学校であるため、他の4年制普通学校を卒業して5年に編入する生徒が存在したはずであるが、22年時点での5年生の数は少なく、26年になってから増加していた<sup>12</sup>。

なお、最終学年まで在籍した生徒数推移を見てみると、1910年代末は40人程度だったのが、20年代以降は6年制化しても、26年に82名、28年からは毎年140人前後から160人前後へと増加していた。なお、その大部分は男子であり、たとえば1928年の金泉公普の6年生163名中、男子は125名で77%を占め、女子は38名で23%であった。

12 教育制度上、普通学校の修業年限は1920年に従来の4年制から6年制に延長されるが、「但シ土地ノ状況ニ依リ五年又ハ四年ト為スコトヲ得」という例外規定が設けられ（『朝鮮総督府官報』1920年11月12日）、地域により4年制と6年制の学校が混在する状況となった。なお1926年時点では、金泉郡内の普通学校9校中、6年制は5校を占めていた。



グラフ2 全泉公普の学年別生徒数

出典：朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧』各年版。

慶尚北道編纂『自大正8年至昭和3年 慶尚北道統計年報』1930年。

次に、郡内全体の1922年時の初等教育状況がわかる『慶尚北道教育及宗教一斑』（1922年版）によって、公立普通・私立各種・私設学術講習会・書堂各々の機関数・生徒数をまとめたのが表2である。

まず、教育機関の設置状況であるが、公立普通学校は5校あり、これら公立普通学校<sup>13</sup>の1922年までの卒業生総数は565名であった。私立各種学校としては4校計上されており、いずれも併合前後からの歴史があり、10年以上教育活動を続けてきている。ただしこれらはすべて修業年限が4年であり、かつその学級数を見ると2学級制をとっているのは2校で、残り2校は1学校1学級制となっており、生徒数も1学校の平均をとると48名と大変小規模であった。

次に生徒数における各機関状況を見ると、1922年の段階で公立普通学校生徒は35%を占め、私立各種学校が5%であり、「学校」に分類されるこれら機関の生徒が全体の40%を占めていたことが注目される。私設学術講習会は37%、書堂は23%であった。ただし、機関数で見ると、公立普通学校は全体の4%にすぎず、郡内の主要な地域以外は学校がないのに対し、書堂は67%を占め郡部に散在していたことが推測される。

### (3) 高等普通学校の設置状況と金泉高普

高等教育機関に接続するものとして、学校制度の中心に位置する高等普通学校（官・公立、私立）<sup>14</sup>の設置状況について見てみると、官立として京城および平壤に京城高等普通学校お

13 渡部学・阿部洋編『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮編）』第39巻（下）、龍溪書舎、所収。これら5校の公立普通学校のうち、知禮公普を除く4校に「明倫学校」が1922年5月に付設されていた。その生徒数は355名であり、翌年の統計では2年制をとっていたことがわかるが、詳細は不明である。

14 本稿の考察対象である金泉高普が男子校であったため、女子高普については基本的に叙述の対象外となっている点を断っておく。